

令和7年度 伊那市立長谷小学校評価表

学校関係者評価；(A：十分達成された B：ほぼ達成された C：不十分であった) 自己(項目間相対を加味した到達度)評価(a：十分達成された b：ほぼ達成された c：不十分であった)

学校教育目標	重点目標(中長期的目標)
輝け長谷っ子 ともに学び ともに育つ	目指す子ども像 自分で考え、自分から取り組む 長谷の子ども
	今年度の重点目標
	(1)輝く長谷っ子(自己肯定感・自己有用感を育む子ども) ◇温かな学校・学級づくり ◇さん付け呼び ◇心をつなぐあいさつ ◇思いやりを育む異学年交流 ◇保小中連携 ◇読書活動の推進 ◇心身の健康保持 ◇人間関係力・レジリエンスの育成 ◇相談体制 ----- (2)ともに学ぶ(自ら考え、取り組み、かかわる子ども) ◇『子供が主役』の授業づくり ◇探究的な学び ◇効果的な少人数学習 ◇協働的な学び ◇ICTの活用 ----- (3)ともに育つ(ふるさと長谷に誇りと愛着をもつ子ども) ◇ふるさと学習 ◇地域の方との交流

総合評価		
○「自分で考え、自分から取り組む」が、主に高学年の児童の評価がよかった。合言葉の「考えよう、やってみよう」が意識されおり児童会活動など自分で考えて決めて行動したことで自分の良さに気づいたり自信につながったりしている。保護者の記述からも具体的な姿から実感できている。 ○地域の自然の中で継続して活動したり、自分たちの願いを達成するために地域の方とつながりながら活動したりと、長谷の地域を生かした取り組みを行うことができた。50周年記念小中合同音楽会では、保育園から高校生まで、地域の子どもたちが参観する機会がを作ることができ、長谷ならではの取り組みとなった。 ○教師の自己課題に基づいた同僚性を生かした研究・研修を進め、授業改善に取り組むことができた。		
成果と課題	評価	改善策・向上策
(1)児童会では「名前呼び挨拶をしよう」と呼びかけ、一人一人のつながりがさらに深められるように取り組めた。中学校や他の小学校なども含めた交流を行い、認め合い励まし合う姿が多く見られ、人間関係を作る経験をする事ができている。 (2)個別最適な学びと協働的な学びについて指導主事をお呼びし、研修を深め授業改善に励んだ結果、児童の自己評価が上がった。ICTの活用も研修を重ね、少しずつ授業に取り入れられている。学習の理解の定着を図れるよう見とどけに力を入れていく必要がある。	A b	○日常的に子どもの様子を観察し、いじめ・不登校・虐待は、早期発見・早期対応に努め、引き続き安心できる場にしていく。 ○自分で考えて決めて取り組む経験を増やし、自分の良さや可能性を伸ばしていきたい。
(3)地域の「人」「もの」「こと」を題材に、食の学習で地域の方とつながり、福祉施設とも継続して交流することができた。	B b	○個々の子どもに寄り添い、個別最適な学びと協働的な学びを適切に取り入れ、日常的に授業改善に努める。また、お互いに授業を見合い子どもの姿や授業展開について語り合う機会を作る。 ○ICT機器を有効活用するための、職員のICT研修を定期的に行う。
	A a	○今後も地域の「人」「もの」「こと」を子どもの願いをもとに積極的に学び、地域を愛し、地域から愛される子どもを育てる。

領域	対象	評価項目	評価の観点
教育活動	教育課程	①学校目標達成に向けての教育課程の展開	○学校教育目標「輝け長谷っ子ともに学び ともに育つ」、目指す子ども像「自分で考え、自分から取り組む 長谷の子ども」、合い言葉「考動力 ～考えよう やってみよう～」を意識した教育課程が展開できていたか。
		②特色ある教育活動の展開	○地域・学校・学級・児童の特性を生かした教育活動ができていたか。(孝行猿学習、長谷っ子クラブ、米作り、御山や親水公園での活動、総合的な学習の時間 等)
	学習指導	③「主体的・対話的で深い学び」を意識した協働的な学びの実践	○友と関わり合い、意見交換をして共に学びを深め合う場面を設定するなど、授業の工夫ができていたか。 ○「わかった・できた・深まった」等、児童が達成感を感じる授業ができたか。
		④個に応じた学びの実践	○児童の育ちを把握し、次の指導に生かす評価ができたか。 ○個に応じた学び方を工夫していたか。 ○児童一人ひとりの考えを大切に豊かな心を育もうと取り組めたか。
	生徒指導	⑤児童理解に基づいた個々の児童への指導	○児童の気持ちを大切にできていたか。 ○児童理解にかかわる職員間の連携・対応はできていたか。 ・「全職員で全校児童を見る」ことが基本。
		⑥児童の実態に基づいた適応指導	○いじめ防止や不登校に関わり、改善に向けた個別の指導につなげているか。 ・児童との対話やアンケート等の情報収集を行っているか。
学校運営	安全	⑦安全の確保	○事故や感染防止を重視し、安全指導がきめ細かになされ、安全の確保ができたか。
	地域との連携	⑧地域の素材・人材の活用と協力連携の構築	○地域の素材を生かしたり、保護者・地域の人々に参画してもらい授業や活動を行ったりして、地域とのつながりや協働の姿勢を大切に取組ができたか。
		⑨教育活動実践の地域への発信	○ホームページや学校新聞、学級通信等により、学校の様子を地域や家庭に積極的に発信することができたか。
	研修	⑩校内研究・研修の工夫・改善	○自己を高める意識を持ち、研修ができていたか。 ・小中連携職員の相互授業参観・公開授業、ICT(オンライン授業)研修 等

成果と課題	評価	改善策・向上策
○児童会で児童会テーマに具現に向けて、2か月に1回月目標を児童自身で話し合い決めだし、全校で目標に向かって取り組むことができた。マラソン記録会のコースを複数設定し、自らの目標にあったコースを選択するなど、自分で決めることを大切にしたい。	A b	○「月目標決め集会」で学校生活の良さや課題を日常的に実感したり意識したりできた。学校がよくなっているという実感をさらに持てるよう、評価の工夫(見える化)をしていく。行事など児童に委ねる部分を見つけ、考えてやってみる機会を増やしていく。
○どの学年も地域に出かけ、その場所やものや人とのかかわりを持ち、長谷地域から学ぶことができた。	A a	○今後も積極的に地域へ出かけて地域を楽しむことから学びにつながったり、自分たちのやりたいことを実現するために自ら地域とつながっていったりしていきたい。
○個別最適・協働的な学習をテーマに、職員が自己課題を設定し授業公開し、チームで意見交換を行ってきた。授業力の向上がみられ、児童アンケートからも「わかりやすい」との評価を得た。	A b	○職員個人の課題をもとに授業改善に取り組み、授業公開を行い意見交換するなど同僚性を重視した授業力のアップを目指す。また、児童の追究意欲がかき立てられる問いについて考え合う。
○児童一人ひとりの特性に配慮した指導を心掛けるため、ICTを活用して視覚的に提示したり、個々のレベルの応じた問題を用意したりと、どの子も学びやすい環境、授業づくりに取り組んだ。	B b	○少人数のよさを生かした個に応じた支援を引き続き取り組む。また、支援の方向性を考えるために、児童の理解度を把握していく。そのために振り返りの時間を重視していく。
○学年会で児童理解の時間をとり、心を寄せたい児童の様子を全職員で情報共有し理解を深めた。SCの先生を講師に、児童の行動をもとにして、その子の内面を考え合う研修を行い支援に生かした。	A b	○職員間での児童理解・情報共有を引き続き大切に行う。子どもの現れを子どもの内面や背景から推測していきたい。そのために、児童理解研修を位置付けて、全職員で全校児童を見ていく。
○いじめや不登校に関わる事案は常にアンテナを高くし、早めに保護者と懇談する機会をとった。児童や保護者の気持ち・立場に寄り添い、支援策を考え、職員間や関係機関と連携して対応してきた。	B b	○配慮を要する児童は注意深く見守り、必要に応じて支援会議を開き、SSWやSCとの懇談や教育相談員の助言をいただきながら児童・保護者の立場に立った対応を進めていく。
○児童がケガをした時の保護者連絡の校内対応を見直し、保護者の不安を減らすように努めた。危険動物の情報があつたときは、メールで知らせ、登校時のワゴン手配など安全対策を心掛けた。	A a	○防犯教室に加え、危険動物に出会った時の対処法なども、児童に知らせていく。引き続き、保護者に知らせた方がよいことは、早めにメールで知らせる。
○よもぎ採りで高齢者クラブの方、長谷っ子クラブの講師の方、読み聞かせボランティアの方々との交流だけでなく、地域の高齢者福祉施設、保育園児等、幅広く交流することができた。地域を活気づけるお祭りに、ものづくりや販売活動で参画することができた。	A a	○行事やクラブ活動など定期的な交流は進められている。今年度、クラスの活動で地域の方や保護者とのかかわりが生まれつつあるので、今後もクラスの活動の中で地域の方とつながっていく方向性を探していきたい。
○学校新聞(学校だより)・学級通信は定期的に子どもたちの活躍の様子を入れて発行した。学校だよりは保護者へデータ配信と変えた。多くの保護者が「子どもの様子がよくわかる」と評価している。	A b	○HPや学校新聞で、児童の活躍を中心に紹介していく。児童の様子とともに、学校が大事にしている考え方やその取り組みも知らせていくようにしたい。
○長谷中学校職員と合同で総合的な学習の時間の様子を意見交換し、育てたい力や大切にしたいことについて共通理解することができた。ICTの活用を進めるために、職員研修を行ったり、情報交換をしたりしたおかげで、授業に生かす職員が増えてきている。	A a	○小中の職員が児童生徒を知ったり、育ちを語りあつたりすることで、目指す子ども像が明確になるので、小中合同の行事並びに研修を今後も大事にしていく。その他、ICTを活用した授業についても研修を図っていききたい。

